

いくつかのグループ技法の紹介

アクティブラーニングでの代表的なグループ技法について、汎用性の高い方法、構造化された方法、多人数クラスでの工夫、の順に簡潔に紹介します。その後、適切なグループサイズおよび学習評価の方法について補足します。

グループ技法についてさらに知りたい方には、『協同学習の技法』（バークレイほか、2009）が参考になります。グループ学習に関するさまざまな疑問に答える資料としては、『先生のためのアイデアブック』（ジェイコブズほか、2005）が参考になります。

<汎用性の高い方法>

（1）Think-Pair-Share

自分の考えを明確にし、他者の意見と対比しながら考えを深めていくのに有効です。また、クラス全体での討論の準備にもなります。

- ①教員が全体に一つの質問をする（あるいは問題を出す）。
- ②数分、個別に考える。
- ③ペアを組んで互いに答を紹介し合う。違いがある場合にはそれぞれの根拠を明確にする。あるいは双方の意見を併せて一つの見解にすることを試みる。
- ④4人～6人組になり、それぞれのペアで話し合った内容を紹介する。

（2）ラウンド・ロビン

4人～6人組で順にアイデアや意見を述べていくもので、ブレインストーミングの簡易版です。質問や評価をせずに、新しい考えを次々に生み出していくことが目標です。出てきた考えは記録していき、次段階の課題（KJ法的にまとめるなど）に用います。

- ①教員が全体に一つの質問をする（あるいは問題を出す）。
- ②教員から注意事項として、質問や評価を挟まずに素早く簡潔にアイデアを出していくよう指示する。記録者を決めさせ、また、一巡で終了するのか何度か周るのか、あるいは時間制限をするのか、といった詳細も伝える。
- ③誰からスタートするか決め、開始する。

（3）ピア・レスポンス

レポートやプレゼンテーションなどの準備過程で、アウトラインを他者の目を通して検討し改善のヒントを得るとともに、他者の文章を率直な読み手として吟味し感想や改善案を伝えるものです。書き手と読み手の双方の視点を体験しフィードバックし合うことで、表現能力を高めることができます（大島ほか、2005）。

- ①ペアになり、互いのアウトラインを読み合う。
- ②一方が自分のアウトラインを説明する。他方は聞き手になる。
- ③聞き手は相手のアウトラインを自分の言葉で再生し、適宜確認する。
- ④聞き手はアウトラインのよいところ、次いで改善した方がよいところを伝える。
- ⑤役割を交代し、②～④を繰り返す。
- ⑥相手からのフィードバックを参考に、各自でアウトラインを改善する。

<構造化された方法>

(4) ジグソー

一旦4人～6人組になったうえで、各メンバーが自分に割り当てられた学習内容を別グループで深め、元のグループに「専門家」として戻り、互いに教え合う方法です。教えることができるためには、理解が十分深まっていないといけないことに着目したものです。最後にクラス全体で理解の確認や討論を行うことが望ましいでしょう。

- ①教員から、学習するテーマとそれを4つから6つに細分化した学習内容を提示する。
- ②グループ内で各メンバーが担当する学習内容を決め、一旦グループを解いて、学習内容別に「専門家」グループをつくる。
- ③各「専門家」グループで担当内容の学習を深めるとともに、それを他者にわかりやすく教える方法を工夫する。
- ④「専門家」グループを解き、もとのグループに戻って担当内容を教え合う。

(5) マイクロ・ディベート

ディベート（松本, 1996 など）はとくに授業の総括段階できわめて有効な活動ですが、本来のディベートを授業で行おうとすると5コマ程度かけることが必要になります。通常の授業ではその余裕がないでしょうから、疑似ディベートとして行うのがマイクロ・ディベート（堀, 2012）です。ここでは2コマを使って実施するものとします。

- ①教員から論題を提示する。
- ②個別に、肯定または否定のいずれの立場をとるかを決め、その論拠を5つ以上書き出す。
- ③さらに、その反対の立場をとったと仮定し、その場合の論拠を5つ以上書き出す。
- ④3人組になり、肯定側・否定側・ジャッジの役割を順にとり、3回のディベートを行う。

その際のフォーマットは、たとえば以下のようにすると40分程度で一巡します。

1. 肯定側立論（2分）
 2. 否定側立論（2分）
 3. 肯定側反論（1分）
 4. 否定側反論（1分）
 5. 自由討論（2分）
 6. 判定
 7. 振り返り（3分）
- ⑤授業外課題として調べ学習を行い、次の授業回にグループを変えてディベートを行う。
 - ⑥まとめとして、反論の想定を含めた意見レポート（2,000字程度）を提出する。

(6) LTD (Learning Through Discussion)

話し合い学習法として知られているものです（安永, 2006）。学生はノートを作りながら予習用資料の内容を理解し、他の知識や自己との関連付けを行ったうえで授業に臨みます。この、収束的な学習と拡散的な学習を事前に十分に行うことが話し合い学習には不可欠です。授業では5人組になり、以下のステップ（計60分）にしたがって予習ノートをもとに理解と評価を深めていきます。

- ①導入の雰囲気づくり（3分）

- ②予習課題の内容理解を確認するために、言葉の定義と説明（3分）、全体的な主張の討論（6分）、話題の選定と討論（12分）
- ③他の知識との関連付け（15分）および自己との関連付け（12分）
- ④学習課題の評価（3分）および学習活動の評価（6分）

<多人数クラスでの工夫>

（7）学生主体型実地調査

阿部和厚氏（元・北海道大学）が90年代後半に「医学概論」の授業で実践した方法です（阿部, 1996; 小田・杉原, 2010）。100人の初年次医学生に毎回2人以上の教員で対応し、調査準備のサポートや必要なスキル（実地調査の際のマナーなど）のミニレクチャーなどを行っています。早期臨床体験の事前学習として位置づけられていたものでもあります。

- ①10人グループを10組つくる。授業2回目から5回目までは、ビデオ視聴やゲスト講演をもとに全体討論を行う。
- ②それらを踏まえて各自で「医学・医療をめぐる問題点」を考え、グループ内で報告し合う。
- ③各グループから5つの「問題点」を出し、全体で討論して最終的に10の調査テーマに絞りこむ。
- ④各グループで1つのテーマを分担し、個々人で調べ学習を行う。
- ⑤各自の学習をまとめ、グループ毎にテーマの詳細を発表する。さらに実地調査の計画を具体化して発表する。
- ⑥2週間で実地調査を行い、調査結果の発表準備をする。
- ⑦最後の3回を公開授業とし、全体発表と討論、総評を行う。

（8）多人数双方向型授業

木野茂氏（立命館大学）の取り組みとして、150人規模の授業でのグループ研究やディベートが知られています（木野, 2005, 2009）。教員と学生、また学生間のコミュニケーションが重視され、授業中の意見交換やBBS（本学ではWebClass上の会議室にあたります）でのディスカッションの学習促進効果も確認されています。以下はグループ研究の場合の例です。

- ①7人～8人の課題別グループを20組つくる。課題は、10章程度から成るテキストの各章を2グループで担当し、その章の内容に関連していかつテキストが取り上げていない事例を検討するなど。
- ②授業2回目から5回目まで調べ学習を行う。
- ③その後の10回の授業で2グループずつが研究成果を発表する（各15分）。聴衆は毎回のレポート課題として、まずテキストの該当章を要約して授業に臨み、質疑応答後、グループ発表をテキストの内容と関連付けて論じて提出する。
- ④各発表への質疑応答は15分とする。質疑応答の内容は質問者が授業後にBBSに記入し、また応答が不十分であった発表者は補足の回答をBBSに上げる。
- ⑤全発表終了後、総括レポートを提出する。

(9) チーム対抗型多人数討論

橋本勝氏（富山大学）の創案によるもので、競争原理とゲーム感覚を適度に取り入れ、150人規模の授業でも活発な討論を実現しています（清水ほか, 2009）。経済学の授業風景が（60人程度のクラスですが）<https://takumi.iwate-u.ac.jp/>に上がっています。背景に、「シャトルカード」による教員と個々の学生との密なコミュニケーションがあることも特徴です。

- ①教員から示された10程度のテーマのうち、各自が関心をもつものを選ぶ。
- ②同じテーマを選んだ者同士で3人～4人のチームを組む。
- ③もう1つのテーマをチームで選び、合計2つのテーマに関して調べ学習を行う。
- ④発表用レジュメ案を、テーマ毎に決められた期限（該当授業の数日前）までに提出する。
- ⑤各回の授業では、教員によって選ばれた各テーマ上位2チームが発表し（各10分以内）、質疑応答に40分～50分をかける。聴衆はチーム単位で質問を考える。その後、発表2チームに勝ち負け投票を行う。

<補 グループサイズおよび学習評価について>

(1) グループサイズについて

グループの大きさは、3人から5人が適当といわれています。4人であれば、ペアでの作業と連携させることができ便利です。3人掛けの机を合わせて6人組にすることも多いですが、その程度が1グループとしては限界でしょう。それ以上になると、サブグループでの活動になりがちです。いずれのグループサイズでも、各個人の役割や責任がはっきりしていることが大切です。また、集団思考の前に個人思考の時間が確保されていることも大切です。そうでない場合、フリーライダーが生まれたり十分な意見交換ができなかったりするからです。

(2) 学習評価について

グループ活動の比重が大きい授業では、個人とグループの双方の評価を合わせたいことがあります。たとえば、個人の成績とグループの成績を50%ずつ加えて最終評価とすることもできますし、グループの成績を個人の貢献度に対応させて加算するということもできるでしょう。もちろん、貢献度自体を評価対象とすることもあるでしょう。

グループへの参加度や貢献度は、自己評価によることもあれば相互評価によることもあります。期末の評価だけでなく、グループ活動の途中で行えば軌道修正が可能になります。

自己評価の場合には、たとえば以下のような項目を使うことができます（パークレイほか, 2009, p.73）。

1. グループに貢献するための準備を行った。
2. 課題に取り組んだ。
3. 仲間の発言をよく聞いた。
4. 話し合いに参加した。
5. 参加するように仲間を励ました。
6. 全体的に考えて、グループ活動にうまく参加できた。

相互評価の場合は、各メンバーについて、たとえば以下の観点を用いて評価することができます（バークレイほか, 2009, p.74）。

1. 事前準備
2. 傾聴
3. グループへの貢献
4. 仲間の尊敬
5. 批判的思考のスキル
6. 問題解決のスキル
7. コミュニケーションのスキル
8. 意志決定のスキル

これらはジェネリックスキルとしても重要な評価観点であることから、教員が事前にそれぞれの意味内容を学生と共有しておくことが望まれます。加えて、グループ活動の見立てをふまえて教員と学生の間で各メンバーの参加度や貢献度等について意見交換があれば、評価観点の理解も深まり、グループ活動で期待されていることもさらに明確になります。

自由記述でグループ活動を振り返ることも大切な学習機会となります。たとえば、その日のグループ活動を通して「学んだ教訓は何か」「自分自身について気づいたこと、発見したことは何か」「メンバーについて気づいたこと、発見したことは何か」の3点を記述させるなどです（佐藤, 2010, p.141）。期末に、学習活動の記録や各種の成果物を踏まえてグループで自己評価を検討し合えれば、自律的な学習評価の力がつくことも期待できます。

参考文献

- 阿部和厚 (1996). 大学における教授法の研究－医学教育を例にして 高等教育ジャーナル, 1, 170-189.
- バークレイ、クロス、メジャー共著（安永悟監訳）(2009). 協同学習の技法－大学教育の手引き ナカニシヤ出版
- 堀裕嗣 (2012). 教室ファシリテーション 10 のアイテム・100 のステップ 学事出版
- ジェイコブズ、パワー、イン共著（関田一彦監訳）(2005). 先生のためのアイディアブッカー協同学習の基本原則とテクニック 日本協同教育学会
- 木野茂 (2005). 大学授業改善の手引き－双方向型授業への誘い ナカニシヤ出版
- 木野茂 (2009). 教員と学生による双方向授業－多人数講義系授業のパラダイムの転換を求めて－ 京都大学高等教育研究, 15, 1-13.
- 松本茂 (1996). 頭を鍛えるディベート入門 講談社ブルーバックス
- 小田隆治・杉原真晃編著 (2010). 学生主体型授業の冒険－自ら学び、考える大学生を育む ナカニシヤ出版
- 大島弥生・池田玲子・大場理恵子・加納なおみ・高橋淑郎・岩田夏穂 (2005). ピアで学ぶ 大学生の日本語表現－プロセス重視のレポート作成 ひつじ書房
- 佐藤浩章編 (2010). 大学教員のための授業方法とデザイン 玉川大学出版部
- 清水亮・橋本勝・松本美奈編著 (2009). 学生と変える大学教育－FD を楽しむという発想 ナカニシヤ出版
- 安永悟 (2006). 実践・LTD 話し合い学習法 ナカニシヤ出版